

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣先機関等利用マニュアル

2011年 10月 18日

派遣者氏名（専門分野）	川越 道子 （ 日本学 ）
-------------	---------------

派遣期間	2011年 7月 15日 ～ 2011年 9月 15日
------	-----------------------------

派遣研究機関

国	都市	訪問機関
アメリカ合衆国	サンフランシスコ ニューオーリンズ	グライドメモリアル教会、Indochinese Housing Development Corporation 他 Mary Queen of Vietnam Community Development Corporation

利用マニュアル（利用申請に必要な書類、手続き、リサーチ方法を記入）

サンフランシスコでは、グライドメモリアル教会をはじめ、教会が位置するテンダーロイン地区内にある Vietnamese Youth Development Center、Indochinese Housing Development Corporation、Roaddawgz Homeless Youth Creative Drop-in Center、The Vietnamese Community Center of San Francisco、Vietnamese Elderly Mutual Assistance Association などの非営利活動団体を訪ねた。

まず簡単にグライドメモリアル教会の説明をしたい。1929年に設立された同教会は、一般の保守的な教会とは異なり、時代とともに地域における様々な社会運動の中心となってきた。現在では、教会を母体としたグライド財団が結成されて、多様な人々が集うテンダーロイン地区において、主にホームレスや低所得者、高齢者、薬物やアルコール依存や精神疾患の人々を対象に、様々な社会奉仕活動を行っている。今回ボランティアとして参加した Free Meal Project は、グライドの奉仕活動の軸ともいえる活動で、毎日、無料の食事をホームレスや高齢者の人々に提供するものである。朝食だけでも毎回 600～700食を用意する同プログラムは、ボランティアによって支えられていることもあり、ボランティア・プログラムのコーディネーターに連絡すれば、翌日から参加できる。ボランティアに来る個人以外にも、教師に引率された中高生や Community Service（交通違反などの処罰として一定期間社会奉仕活動を行う）のボランティアも多かった。活動後にボランティアの食事も提供されるため、その時間に他のボランティアや専従スタッフの話を聞くことができた。アメリカの社会問題が凝縮されたような場所であるため、より多角的な視点から問題関心を捉え返す機会となった。グライドでは他にも、無料相談をはじめ、依存症からの回復支援、HIV/AIDSの予防や啓発活動、女性や子供の支援プログラムなども充実しており、インターンも受け入れている。

上記の団体の中には、ボランティアを希望する場合に指紋登録証の提出が必要な団体（Vietnamese Youth Development Center）やボランティアを受け入れていない団体（Roaddawgz Homeless Youth Creative Drop-in Center や Vietnamese Elderly Mutual Assistance Association）もあるが、事前に連絡の上、訪問の趣旨を伝えたところ、実際に活動を見学し、聞き取り調査を行うことができた。子供と関わるボランティアは、身元の確認を求められる場合が少なくない様子であったが、70年代にインドシナ難民として地区内に定住した家族や子供たちの支援を行っている Indochinese Housing Development Corporation の放課後プログラム（学童保育のような活動）は、ボランティアを受け入れており、室内での写真撮影も許可していただいた。

Roaddawgz Homeless Youth Creative Drop-in Center は見学者を制限しているが、代わりに充実したウェブサイトを発信の場としており、ネット空間が「現地」調査となることも認識した。

ニューオーリンズでは、友人の紹介を介して、2005年のハリケーンカトリーナによる被災後に発足した非営利特定活動法人「Mary Queen of Vietnam Community Development Corporation」の代表であるグエン・テ・ビエン神父の許可をいただき、同団体の活動にボランティアとして参加した。

ハリケーンによる被災を契機にコミュニティの再生に取り組む同団体は、主に地域の住民の生活支援をはじめ、都市農園プロジェクトや医療施設建設事業などの長期計画を遂行している。実際に日常業務を行う専従スタッフ全員がベトナム系アメリカ人であり、年齢や家庭環境によって語学力の差はあるが、英語とベトナム語でコミュニティの住民に対応している。英語の読めない高齢者に代わって各社会福祉の手続きをしたり、失業者への職業斡旋を行ったりする他に、農園プロジェクトでは、魚やエビ漁で生計を立てているコミュニティ住民の生活の安定を目的に、コミュニティ内の土地で副業的に農業に取り組むことを目指している。滞在中は、セカンドハーベストから支給された食材を住民に配ったり、コミュニティ内で生産された野菜を市内のファーマーズマーケットに売りにいたり、通訳や簡単な事務作業を行う傍ら、来所する高齢者の話を聞き、専従スタッフに聞き取り調査を実施した。具体的に活動に参加することによって、コミュニティの課題を体感することができた。

調査や会話は英語とベトナムで行ったが、ベトナムの各地方から集まってきている人々の方言を聞き分けることは、ベトナムで現地調査を行う以上の言語能力を要した。また滞在の後半、英語とベトナム語が混同して、両方の言葉が下手になっていく感覚に陥った。現地調査には十分な語学力と精神力が必要であることを改めて実感した。ニューオーリンズの調査地は、交通の不便な場所にあり、また治安があまり良くないことから、一人で歩き回ることをよく牽制された。近距離でも車での送迎に頼らざるを得ないことは窮屈ではあったが、最低限、治安上の土地勘を得るまでは友人たちの送迎に甘えることにして、自らの判断を過信しないように心掛けた。より長期の滞在となる場合、その土地に適した移動手段を確保しておきたい。